

キリスト教神学

第6章 神学とその言語

—宮基督教研究所

安黒務

「キリスト教神学」 概略

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪
7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

第1部 神を研究すること 概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

第6章 神学とその言語 概略

1. 神学的言語と検証的分析：無意味であるという非難
2. 神学的言語と機能的分析
3. 無意味であるという非難に対する答え
 1. 人格的言語としての神学的言語
 2. 神学的言語と終末論的検証
 3. 形而上学的総合としての神学的言語
 4. 洞察とコミットメントの手段としての神学的言語
4. 言語行為論

第1節 神学的言語と検証的分析： 無意味であるという非難

1. ムーア、ラッセル：言語分析に取り組む
2. もうひとつのタイプの言明
3. 言明を意味あるものにするのは何か？
4. それが真でなければならないという必要はない
5. 「検証可能性」と「反証可能性」だけが重要
6. 「私の腕時計の中には妖精がいる」
7. 哲学が留意してきた主題の無意味性
8. 同じ問題が神学的命題にも
9. 「バスに危うくはねられそうになった」
10. 「神は祈りに答えてくださる」
11. 二人の探検家がジャングルの開拓地で出会った
12. キリスト教神学に関する主要命題についての状況
13. 論理実証主義は、言語を評価する基準を設定
 1. 「検証可能性の原理」にかなう科学的タイプ
 2. 表出的・情緒的な使用「わあ！」「フー！」「いたっ！」
14. 哲学の言明に言えることは、神学の言明にも
15. 論理実証主義に多くの哲学者が不安を覚えるように
 1. ひとつのカテゴリーに分類する手際の良さが作為的である
 2. 「検証可能性の原理」の位置：分析的な言明か、総合的な言明か
 3. ヴィトゲンシュタイン：哲学の諸命題は単に「解説的」なもの

第2節 神学的言語と機能的分析

1. フェレー：「機能的分析」
2. 後期ヴィトゲンシュタイン：「言語ゲーム」
3. 哲学の主要な役割：言語が文脈においていかに機能しているかを研究すること
4. 機能分析のふたつの方法
 1. パラダイムケース・テクニク
 2. 意味作用比較のテクニク
 - 「この高速道路が今開通する」
5. 言語ゲームはそれぞれルールをもっている
 1. 「...のとき、私の襟の下は熱くなった」：カテゴリー違反
 2. 哲学者の仕事：カテゴリー違反を探すこと

第3節 無意味であるという非難に対する答え 人格的言語としての神学的言語

- ウィリアム・ホーダーン
 1. 神学的言語は人格的言語のパターンに従っている
 2. 人格言語ゲームのモデルを神学的言語の性質と機能の理解に適用
 3. 神は物や客体というよりも人格であり主体である
 4. もうひとつの問題が発生する

第3節 無意味であるという非難に対する答え 神学的言語と終末的検証

■ ジョン・ヒック

1. キリスト教の言語の有意味性を確保するため「終末論的検証」の概念を導入
2. 神学に経験的な位置を与えようとする二つの試み
 1. 形而上学的総合のかたちで神学に関わる
 2. 洞察とコミットメントの手段として

第3節 無意味であるという非難に対する答え

形而上学的総合としての神学的言語

- フレデリック・フェレー
- 1. キリスト教は認識論的なもの - 教義の真理性は確定できる
- 2. 形而上学とは一つの世界観である
- 3. アメリカン・フットボール - はじめての観戦
- 4. 世界観・人生観と多種多様な人生経験との関係
- 5. 一般記号論を発展させている
 - 1. 意味論
 - 2. 構文論
 - 3. 解釈論
- 6. 形而上学的体系の「等級」について
- 7. 基準には二つの等級、それぞれの等級には二つの基準
 - 1. 内的基準(等級)
 - 1. “整合性”
 - 2. “首尾一貫性”
 - 2. 外的基準(等級)
 - 1. “適用性”
 - 2. “十分性”
- 8. 基準を満たしているとしたら、正しいかどうか問わなくても良いのか
- 9. 単なる理論的モデルではない
- 10. 最後に留意しておかねばならないこと
- 11. この種のアプローチに一つの批判
- 12. キリスト教神学の言語は認識上有意味である

第3節 無意味であるという非難に対する答え

洞察とコミットメントの手段としての神学的言語

1. 形而上学的総合の記号として認識上意味がある
2. 宗教的言語は堅く冷たい客観的事実を述べたものではない
3. ラムジーの実例
4. 二通りに見える階段
5. 見るたびに、いくつもの意味の発見
6. 宗教的言語 - 二つの視界、二つの意味のレベル
7. 宗教的言語は一風変わった方法で豊かな意味
8. もうひとつの要素
9. 単に洞察力だけではない
10. 意味についての狭義の基準を拒否 - 広範な形而上学的総合の一角として認識上有意味

第4節 言語行為論

1. その起源は、ジョン・オースティン
 1. “言明すること”
 2. 「行為遂行的」
 3. 「事実確認的発話」
2. ジョン・サール
 1. 発語 (Locutionary)
 2. 発語内容 (Illocutionary)
 3. 発語媒介的 (Perlocutionary)
3. 修正版
 1. 発話行為 (Utterance acts)
 2. 命題的行為 (Propositional acts)
 3. 発語内行為 (Illocutinary acts)
4. 発せられた音が達成しようとするものが強調
5. 言語行為を評価するというより広い見地に導く
6. この見解は宗教的言語を扱う際に有益なのか？
7. 宗教的共同体間の言明を評価するのに用いる何らかの基準が存在するか？
8. シセルトン: 言語行為論を聖書解釈の実践に適用
9. フーザーの言語行為論
 1. 命題 - 事実 - 効果
 2. 目的 - 機能 - 意図
 3. 存在 - 形式 - 受肉
 4. 力 - 影響力 - 発語内行為
10. 神は記された説話行為を通して聖書にご自身を啓示する
11. 言語行為論は、有意義な助けとなりうる